



TITLE:

D. A. Wilson, Politics in Thailand,  
1962, Cornell Univ. Press, xv+307

AUTHOR(S):

矢野, 暢

---

CITATION:

矢野, 暢. D. A. Wilson, Politics in Thailand, 1962, Cornell Univ. Press, xv+307. 東南アジア研究 1963, 1(1): 81-82

ISSUE DATE:

1963

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54781>

RIGHT:

め、やや立場を異にする。

政治的エリート層と経営者層の協力関係は、バリ島を除けば、好ましくない状態にある。その理由は、部分的には、ジャワの場合のように、イスラム経営者層と prijaji の政治的エリート層の思想的相剋によるが、又、各層の地域的、階層的利害にもよる。この状態を一層混迷させる要因は、政治の焦点が、経済発展の具体的方策よりも、発展の方向と方法を規定するイデオロギーに置かれている点にあるとし、Higgins は政府の企業に対する態度にやや批判的である。

しかし、イデオロギー論議が、何故重視されるかの理由に対する彼の突込み方は、ややもの足りない。急激に変動する社会においては、イデオロギーの明確化は、政治的にも、民間の自発的協力を得るためにも極めて重要な問題である。いずれにしても、この論文は、以上の如き問題は多角的に研究される必要のあることを示す興味ある論文である。(口羽益生)

**J. S. Furnival; The Governance of Modern Burma, 2nd ed. enlarged, 1960, Institute of Pacific Relations, xi+154, mimeographed.**

著者 Furnival は、未完の著 The Social and Economic Development of Burma を遺して、60年夏、祖国英国で、惜しまれつつこの世を去った。そして、この7月7日は、はやかれの死の三周忌にあたる。その未完の著をかれの最終作と数えると、本書は、かれのものした最後から二番目のモノグラフである。

本書は、ビルマ連邦の政府機構の解説をおこなったものである。国家的背景・中央政府・地方政治・各州政府の四部構成のもとに、もっぱら憲法の規定に即した機構論的解説がなされている。著者の当初の目論みは、単なる統治機構の形式的制度論的説明に留まらず、機構の実際の機能の態様までを明確に捉えることであつたと思われるが、その意図は、各州政府のばあいを除き、一応かなり尽くされている感じである。

だが、1958年までのビルマを対象とした本書は、それ以後のめまぐるしい政治的転変のために、もはや絶対的な利用価値を喪ったといわれるかも知れない。しかし、なんといっても、これは、他ならぬ Furnival の本である。1902年に ICS の官吏としてビルマ政庁

に任官して以来、任務のかたわら、常時ビルマの現実とそのあるべき姿を学び来たつた。Furnival は、他の誰にもまして、ビルマ政治について語る資格を有している。本書にも、かれの蘊蓄は随所に盛られている。独立運動その他に関する歴史的叙述の一見なにげない個所にも、貴重な断定や資料提供がある。また連邦政府の運営に関しても、ウ・ヌのもとで十年間政府顧問をして働いたかれならではの、正確かつ該博な知識が披瀝されており、本書の存在意義を高からしめている。

Furnival のビルマ研究の無類の特色は、かれが、研究を進め深める際に、つねに、ビルマ国民への愛情、ビルマ国民の福祉安寧への心遣いを忘れなかったことである。ビルマ政治の研究も、近年における地域研究の発達と共に、従来の現地事情通の好事家的研究から、科学者の問題意識を備えた新しい世代の斬新な研究へと移り変わりつつある。しかし、そうした科学的な冷徹な研究が、ビルマ国民によって必要とされるかどうかは別問題であろう。野心的な政治科学者の一つの傑作よりも、むしろ Furnival の平凡な作品一つにこそ、ある意味では、至上の価値が秘められていることは忘れられてなるまい。古典的名著 Colonial Policy and Practice に吐露されたものと同質のシンパシーが、本書の行間にも脈打っていることを感じえないとしたら、不幸な話である。

いずれにせよ、本書は、ビルマ政治に関心をもつものにとって、必携の一書である。(矢野 暢)

**D.A. Wilson; Politics in Thailand, 1962, Cornell Univ. Press, xv+307.**

従来、論文を通じてのみ研究成果を世に問うていた Wilson (カリフォルニア大学助教授) の待望の書が出た。著者は、タイ政治の研究に関しては、現在の学界で他の追随を許さぬ地位を確保している。かれの研究水準が非凡なだけに、本書一冊を得たことによって、タイ政治研究の全体的水準自体が一挙に高まった感じである。

本書は、タイの現代政治の構造的分析を行なったものであるが、著者が一次資料を駆使し、また現地研究を通じてそれを行なったことによって、従来知られえなかったタイ独自の権力機能のメカニズムが、その全体像においてほぼくっきり描き出されるに至った。た

たとえばエリート構造の解剖 (pp.60~71), 政府諸部省による企業経営の説明 (pp.184~5), 軍隊の性格規定 (pp.191~2) などの個所, さらに第7章の国会の機能の説明, そして, タイでもっとも重要な権力集団としての khana の存在の指摘 (pp.246~52) などの個所では, 著者が, もはや凡庸なタイ研究者の及びもつかぬ域に達していることを否応なしに感じさせられる。Wilson の強みの一つは, タイ語に通暁していることであろう。かれの語学力の非凡さは, 一通りタイ語を学習したとてふつう容易に正しく発音できるものでない個有名詞をば, かれが一切正しい発音通りに表記しきっていることから, その程が判断できる (かれは, たとえば ananda, vajiravud, nagara sva-rga, phyabahol をそれぞれ anon, wachirawut, nakhon sawan, phraya phahon と正確に書き換えている。ただし pramoj は pramot ないし pramod とすべきではなかったか?)。

ただ, Wilson は, どちらかというと, 非歴史学的研究を得意とするが, 望むらくは, いま以上に歴史学的問題意識を研究の土台に踏まえてほしいものだ。タイ政治は, なるほど不変の政治文化に支えられ, 少なくとも32年革命以来, 政治にさしたる質的变化を見てはいない。とはいえ, 政治構造の静態的な把握をなすにしても, 動態的变化にたいして神経過敏であるに越したことはないのだ。静態的な把握は, 当該政治構造の凍結したイメージをつくりあげやすい。むしろ, それは, 反面に動態的把握の意欲に伴われてはじめて, 真に意義を担いうるものである。Wilson に今後期待する面が残されているとするならば, それは, 本書ではまだ十分に尽くされてはいない経済構造の変化, 政治家のパーソナリティの研究などを加味した上で, タイ政治に変化の契機をみつけてもらうことであろう。歴史学的考察を加えることにより, かれの構造分析の成果とて, より深みを増し, より有機的に内部的意味連関性を備えることになるに相異なる。(矢野 暢)

**J.H. Kautsky (ed.); Political Change in Underdeveloped Countries: Nationalism and Communism, 1962, John Wiley and Sons, Inc., xv+347**

本書は, 大きく二部にわかたれている。前半は編者 Kautsky が書き下ろした An Essay in the Politics

of Development という論文であり, 後半は, 新興地域政治について書かれた既成の論文を12編集纂したものである。その12編は, いずれも充実した内容のものであり, 編者の見識の高さを自ずと示している。しかし, 本書の存在意義を高からしめるのは, やはり, 冒頭の編者自身の論文である。これは, 新興地域における共産主義と民族主義との関連を理論的に論じた数少ない論文の筆頭に数えられべき好論文である。

著者の論点を一つにしぼると, the convergence of Communism and nationalism (pp. 79~89) ということになる。著者は, この結論的主張を導き出す過程で, 少なくとも次ぎの3つの命題を提示している。(一), 新興諸国の政治を動かす基本的要因は, 通常階級と称せられる利益集団である。階級間の利害の相克こそ, そこでの政治の主題であり, ひいては近代化のエネルギーの源泉をなす。(二), 新興地域においては, 民族主義と共産主義とはまったく同質の状況から生まれ, 従って, 両者の目標も運動を担う層も基本的には同質的である。(三), 民族主義と共産主義とのイデオロギー上の差異は消失し, 民族主義者と共産党との競合対立も消滅する趨勢にある。

著者の結論は, 歴史発展の試行的読みとして興味深い。上記三命題のうち, とりわけ第二点に関しては, 誰しも首肯するにちがいない。ただし, 残り二命題については, 異論の出る余地があるようだ。まず, 階級関係のみで新興諸国の政治を割り切ることは, あまり感心できない。階級関係に規制されつつも, それからある程度自由な立場で政治を嚮導する, 政治的指導者の創造力や政治理念や社会的性格とかが, もっと重視されてしかるべきであろう。また, 民族主義者と共産主義者との接合をそう簡単に必然視することは妥当でないと思える。新興諸国のこれまでの例では, 民族主義者が, 共産主義の実質的内容を先取し, しかも非共産主義的政体でそれを実現していくばあいが多い (たとえばビルマ) が, Kautsky はかかる現実を説明することができない。

しかし, このような疑問点にも拘らず, かれの立論は全体としてすばらしい説得力を有している。新興諸国と共産主義との因縁をこれほど明快に説いたものはあまりいまい。その意味で, 本書は, 新興諸国の広義の近代化に関心を寄せるものが, 一度は目を通していい文献であるといえる。なお, Kautsky は, ワシン